

高校日本史の日常的な授業を支援する博物館の在り方について

－旧石器・縄文時代の学習を題材として－

伊藤 真*

1 はじめに

「ゆとり教育」を標榜した1998（平成10）年の学習指導要領改訂に伴い、2002（平成14）年度より小学校の社会科教科書から縄文時代以前の内容が消えた。これ以前より縄文時代以前の記述が切り捨てられる傾向にあることは既に指摘されていたが（勅使河原1995）、この2002年は、弥生時代から叙述がはじまる歴史教科書への異議が上がり、各方面に広がっていく画期だった。

縄文時代以前の分野できわめて大きな役割を担う考古学の世界では、旧石器・縄文時代を児童が学ぶ意義についての再確認ばかりか、考古学者の姿勢や考古学の本質をも問い直すことを含めた大議論が展開された（社会科・歴史教科書等検討委員会2008）。2006（平成18）年4月、日本考古学協会は「社会科教科書問題検討小委員会」を設置し、同年11月には文科相や中教審会長へ向けて「学習指導要領の改訂に対する声明」を出した。2011（平成23）年度によりやく縄文時代に関わる記述が小学校教科書に復活したが、これは「日本考古学協会をはじめ、歴史教育の団体などから文部科学省などへの働きが一つにはあったため」だという（剣持2011）⁽¹⁾。

この間、高校においては1994（平成6）年度から世界史が必修になり、日本史は選択必修科目となったほか、従来と同様の内容である日本史Bに加えて、近現代史重視の日本史Aが設定された。大きな改変だった。週5日制の導入に伴い教育課程の編成が窮屈になった多くの高校では、普通科の進学校を除き、標準2単位の日本史Aを履修科目に設定した。結果、旧石器・縄文時代の内容をはじめ考古学の成果は、高校生全体から見れば限られた生徒にしか教えられなくなった（古市2004）。

この状況に、主に高校の教育現場の考古学と関わりの深い教員が危機感を持ち、日本史Bにお

る地域の考古資料活用の促進のほか、日本史Aや現代社会の授業において考古資料等を取り扱う可能性などが模索された（長島1995, 泉田・石澤・吉川2000, 古市2003など）。しかし、その後、2009（平成21）年告示の現行学習指導要領において、近現代史重視の観点から日本史B「原始・古代」の内容が3項目から2項目に再構成されても（文部科学省2009）、危機意識は教育現場や学会等に広く共有されることはなかった⁽²⁾。よって、多くの生徒が旧石器・縄文時代の学習を中学校で終える状況は変わらず、また、近現代史や世界史的観点を重視する傾向が強まる中で日本史Bにおける旧石器・縄文時代の学習はどうあるべきかという議論も、ほとんど為されなかった。

加えて、近年、「博学連携」、すなわち博物館・資料館と学校が連携した教育活動に関わる報告を各館紀要等で多くみるが、ほぼすべてが小・中学生を対象としたものである。高校生を対象にしているプログラムがあっても、小・中学生を対象にしているものときほど変わらない内容であったり、イベント化していたりという状況である。高校の教育目標にかなう、一般的な高校生の日常的な学習を支援して深化させる場や機会を作り得ていないように見受けられる⁽³⁾。

2015（平成27）年8月5日、文部科学省は次期学習指導要領の原案を明らかにした。新科目「歴史総合」（仮称）が目玉だったが、ここで問題にするのは日本史Bを改めた新選択科目「日本史」についてである。日本学術会議史学委員会高校歴史教育に関する分科会は、新「日本史」も「歴史基礎」⁽⁴⁾と同様に、「思考力育成型」で「グローバルな視野で日本を捉える認識を深める」科目でなければならない、そのために「取り上げる事象や事件を制限」しなければならないと提言している（同会2014）。このように高校の歴史教育を取り巻く状況が変化中、近現代史重視という視

*秋田県立博物館

点から最も遠いと思われる原始時代を題材に、考古学研究者や博物館学芸員が高校日本史教育と共同できることについて現実的に考察することは、これからの高校日本史教育全般や「博学連携」の方向性を捉えることにも資すると考える。

以下、本稿では、高校日本史教員を対象にしたアンケート調査や高校日本史B教科書の分析を通じて、高校日本史B科目における原始時代史教育の特徴や課題を浮き彫りにし、その上で、博物館(考古部門)がなすべき活動の在り方について探っていくことにする。

2 高校における旧石器・縄文時代教育の現状と課題 —日本史教員対象のアンケート調査結果から—

高校における旧石器・縄文時代教育の現況を確認し、また、将来の方向性を探るために、秋田県内の県立高校の日本史教員を対象にアンケート調査を実施した(調査用紙は pp.70-71 に掲載)。調査期間は、2015(平成27)年12月11日から2016(平成28)年1月7日までで、メールやFAXで回収した。41校の50名から回答を得ることができた。回答者の年代構成は、20歳代が3名、30歳代が11名、40歳代が26名、50歳代が9名、60歳代が1名だった。うち考古学が専門の教員は6名である。日本史Bの授業を担当しているのは、50名中36名であった。以下、設問4以降の調査結果について、分析を加えて報告する。

(1) 旧石器・縄文時代の授業時間について

設問4では、現在日本史Bを担当している教員に、縄文時代までにかけている授業時数を質問した。すると、旧石器時代については50分授業で平均約1.2コマ(最長2コマ、最短0.5コマ)、縄文時代については同じく平均1.8コマ(最長4コマ、最短0.5コマ)という結果であった。合計では平均3.0コマ(最長6コマ、最短1コマ)である。

設問5では、この授業時数について、5年前と変化したか、適切と考えるかどうかについて質問した。5年前と「変わっていない」という回答が大半で28名(77.8%)、「減っている」が5名(13.9%)、「わからない」が3名(8.3%)だった。「増えている」は0人である。また、現在かけて

いる授業時間について、30名(83.3%)の教員が「適切である」と回答した。「時間が不十分」と答えたのは4名(11.1%)で、「わからない」が2名(5.6%)、時間は多い」は0人であった。

設問6では、近現代史重視傾向が高まる中で、今後、旧石器・縄文時代史の学習(授業時間)はどうあるべきと考えるかを尋ねた。この設問には、現在日本史Bを担当していない教員も回答しているが、これからは「原始の学習は縮減したほうがいい」と答えたのは4名(8.0%)、「原始もこれまでと同じくらい学んだ方がいい」という答えが40名(80.0%)と大勢だった。「原始の学習をもっと増やすほうがいい」は2名(4.0%)だった。4名が「その他」を選択したが、うち3名が「もっと学んだほうがいい」に近い、1名が「縮減したほうがいい」に近い記述内容であった。

【設問6「その他」の記述例】

日本の文化の源流は必ず学ぶべきと思う／考古学の成果を取り入れ、より科学的に教えたい／近現代史中心に学んだほうが良いと思うが、生徒の身近にある原始はフィールドワーク等を行い勉強したほうが良い／時間が取れるなら学んだほうがよい／生徒は先の大戦のことなどを知りたい様子である 等

「はじめに」で述べたように、現行の学習指導要領では高校の地理歴史科に大きな変更が無かった。このため、授業内容を更新することに迫られず、各教員の授業ペースが確立して安定しているという状況にあるようだ。また、ペースが確立しているがゆえに、今後の授業時数について現状維持を望む声が大半になっている面があると思われる。適切な授業時間かどうかは授業内容次第であるが、縄文時代までの教科書記載7ページ余り(山川出版社2014の場合)の内容を2～3コマの授業で取り扱うには、焦点化やテーマ化を図るなどして内容を精選することが不可欠であろう。密度の濃い授業が展開されている様子が窺われる。

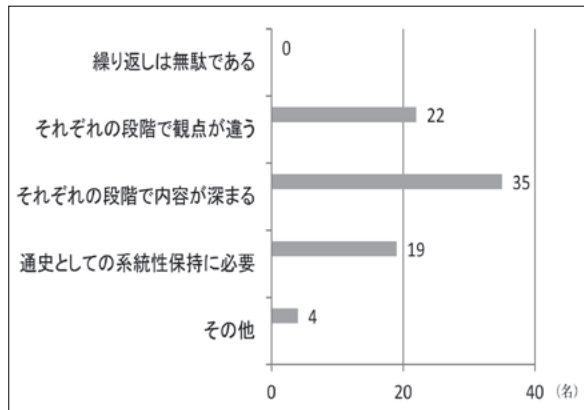
博物館が高校の授業支援を企画する場合は、このような状況を理解しなければならない。日本史授業全体における学ばせたい(あるいは学ばせるべき)内容のバランスを考えたとき、縄文時代以前に割り当てられるのは大体3コマだという現実

である。短時間に実施可能なテーマ授業や題材の紹介、1コマで完結する出前授業などが現実的な方策として考えることができる。この他に可能性があるのは、この時間枠を超えた案ということになるだろう。後述するが、「日本史B」の近現代史項や「日本史A」、「現代社会」において、原始時代を題材とした授業案を提示することなどが考えられる⁽⁵⁾。ただ、どの場合でも、あえて原始時代を題材にすべき意義が教員に納得されて、かつ高校生にとって魅力的で有用感のある提案でなければ実践には到らないだろう。

(2) 旧石器・縄文時代の授業内容について

設問7では、小学校・中学校そして高校と、原始時代の授業が繰り返される中で、高校で授業する意味について質問した。結果は図1の通りである。

図1 原始期授業を高校でも繰り返す意味



設問7は複数回答が可能な問であったが、「エ. 通史としての系統性保持に必要」という授業内容の質に関わらない項目一つだけを単独で選択した教員は4名だった。よって、50名の全回答者中46名(92.0%)が、高校の授業は小・中学校のそれと比べ「内容が深い」か「観点が違う」か、あるいはどちらでもあると捉え、だから、高校の授業は単なる繰り返しではなく有意義であると考えていることがわかった。

続く設問8～11は、高校の授業実践における具体的な工夫について尋ねたものである。

全体的な傾向をみると、原始時代の授業において「(設問11) 地域の遺跡・遺物を取り上げた実践」の実践者は32名(64.0%)と比較的多かった。『高等学校学習指導要領解説 地理歴史科編』では日

【設問7「その他」の記述例】

小中高と段階があがる間に新たな発見があり、新事実が出る可能性がある／高校で必修の世界史と連携して学ぶことで理解が深まる／削減の方向で…小中での既習事項については触れながら、発達段階に合わせて、観点・内容を精選する必要があるかと…等

本史B大項目「(1) 原始・古代の日本と東アジア」の中項目「ア 歴史と資料」に関わる「内容の取扱い」として、「生徒が興味・関心を持ちやすい具体的な歴史資料を選んで用いるようにする。…(中略)…博物館・資料館等の果たす役割やそこにある資料、地域の遺跡、景観や無形文化財などに着目させて、文化財保護への関心を高め、地域の文化遺産を尊重する態度を養うことも重要である。」と述べる。設問11の結果からみると、この点についてよく具現化されているとみられた。特に、設問8(現代とつなぐ授業)への回答であったが、「三内丸山遺跡の発見エピソードから開発と遺跡破壊、遺跡保存の現状について考察させた」とする報告は、地域の遺跡を取り上げる型の授業としても極めて的確な実践例だと考える。この実践は、「言語活動の充実や思考力を深める内容」のものでもあったことだろう。

しかし、一方では「(設問9) 言語活動の充実や思考力を深める内容を取り入れた実践」の経験者が16名(32.0%)であり、「(設問8) 原始と現代とをつなぐ内容を取り入れた実践」経験者も13名(26.0%)、「(設問10) 東アジアとの関係から日本の原始時代をとらえる内容を取り入れた実践」経験者に至っては10名(20.0%)と、必ずしも多くなかった。

「言語活動の充実」は全科目の全項目にわたって意識すべきものであり、現行の学習指導要領のキーワードとして唱えられてからしばらく経った。実践率が3分の1との結果には、改善の余地があると思われる。また、「東アジア視点からの実践」についても、後述するが、高校日本史Bの原始時代学習において注目すべきポイントである。『高等学校学習指導要領』では、日本史B大項目(1)の題名がそもそも「原始・古代の日本と東アジア」であり、その内容についても「原始

社会の特色及び古代国家と社会や文化の特色について、国際環境と関連づけて考察させる。」(傍点筆者)と述べている(文部科学省2009)。高校では原始期の社会や文化の特色についても、国際環境と絡めた広い視野での学習が望まれているのである。更に、授業内容を「現代とつなぐ」ことも、現代社会において原始時代を学ぶ有用性を生徒に実感させ、興味・関心を高め、ひいては思考を促す効果があり、授業づくりにおける重要な観点である。

とはいえ、いずれのパターンの実践も行ったことが無いという回答者は11名(22.0%)で、このうち6名が日本史Aの担当者であった。日本史Bの担当者に限れば、36名中31名(86.1%)が、設問に例示したパターンの実践をしているという結果であった。設問に例示したパターン以外の工夫もあることを考慮すれば、ほとんどの教員が時間的な制約が厳しい状況下でも、生徒の興味・関心を喚起し、生徒の視野を広げ、思考を深める工夫を凝らしたいずれかの実践を展開していると推測できた。挙げられた実践の具体例は、5分程度の投げ込み的なものから授業1コマを要するとみられるものまで多彩で一つ一つが興味深い。

以上、この節では、授業時間の制約が厳しい中でも、中学校までの歴史学習と「観点が違う」そして「内容が深まった」高校らしい授業実現への取組が為されている様子が窺えた。しかし、「言語活動の充実」や「国際環境と関連づけて考察さ

【設問8「原始と現代とをつなぐ実践」回答例】

現代日本人の身体の特徴から導入し、日本人の形成について考えた／三内丸山遺跡の発見エピソードから開発と遺跡破壊、遺跡保存の現状について考察させた／大森貝塚とモース／人口・気候・食生活などの推測・比較等いろいろ／気候変動が人類に及ぼす影響／捨て場からみる環境問題／環境問題や社会共同体についてなど／交易によるコミュニティの広がり／黒曜石と包丁で切れ味を比較する／台所用品調べ→素材について考察させた／器の変化／縄文人骨に見られる虫歯の痕跡から食生活の変化について探究させた／通過儀礼の比較を通じて縄文時代の生活に触れる／幸福論／他者を思いやる気持ちの変化を考える 等

【設問9「言語活動や思考力を重視した実践」回答例】

相沢忠洋や旧石器ねつ造事件について／土器・石器の観察から用途について考えさせ、発表させた／埋蔵文化財センターから縄文土器を借用、実際に触れさせる。各地の遺跡の写真を見せる。それらを題材にして発問する／土器の文様、屈葬などから縄文人の精神世界を考える／史実となった根拠を遺物から考えさせた／現代の生活と金属器以前の生活を比較して考察させた／石器等の用途について／縄文時代の交易と習俗から当時の社会と生活について考えさせた／気候変動による影響について考えさせた／更新世から完新世に移行したことによる変化を多面的に捉えさせた／縄文人の生活と信仰について／言葉と文字を使わないコミュニケーションについて／日本人の形成について、グループごとに資料を読み取らせ、発表させた 等

【設問10「東アジア視点からの実践」回答例】

旧石器時代の大型動物の移動と人々の暮らし／大陸と地続きの時代について／石器の分布地域、DNA研究による日本人の起源／他国と日本で発見された人骨や遺物を比較する／アジアの新石器文化と縄文文化の比較／縄文文化と仰韶文化／農作物の起源について／食料の入手、土器の製法など／コメの伝来等について 等

【設問11「取り上げた地域の遺跡・遺物」回答例】

亀ヶ岡遺跡／三内丸山遺跡5／大湯環状列石10(夏至の日に見学1)／伊勢堂岱遺跡／世界遺産登録推進について／森吉ダム関連遺跡／県北地域の遺跡／学校周辺の遺跡3／杉沢台遺跡／柏子所貝塚／男鹿黒曜石／中山遺跡／槻木アスファルト／地蔵田遺跡4／米ヶ森遺跡／学校所蔵の土器を利用／埋蔵文化財センターから借用の石器・土器を利用2／手持ちの土器・石器をグループに配付、特徴を挙げさせた2／石器で肉を切った／地域遺跡や発掘調査体験の紹介／県立博物館 等(※数字は複数回答数を示す。以下同じ。)

せる」ことなど、まさにこれからの新「日本史」に望まれている「思考力型でグローバルな視点で日本を捉える認識を深める」という点への意識が不十分とみられた。博物館としては、このような学校現場が抱える課題を認識し、専門性を生かしてその不十分さを補うことを意図した情報発信や

地域素材をアレンジしたプログラムなど、学校側が魅力的に思える教育活動を展開できると考えられる。

(3) 博物館との連携について

設問 12 では、博物館が行う出前授業の内容についての要望を尋ねた(複数回答可)。

「秋田県立博物館中期ビジョン 2015～19」では、「すべてを県民と共に」をキャッチコピーにして 7つの具体的な重点目標を掲げている。その一つが、「出張展示・出前講座・出前授業の積極的な実施」である。このうち本稿と関わるのが出前授業であると思われる。

本館考古部門では小学生向けの体験学習的な出前授業や一般人向けの専門的な講座はこれまで実施してきた。しかし、その中間の世代に対してはこの種の教育的事業をなしていないという課題があった。中間世代のうち、中学生はセカンドスクール事業を活用する頻度が高いので、最も博物館との接点が少ないのが高校生といえる。一方、「はじめに」で述べたように、授業の取組の変革期を迎え、高校側にも専門性に基づいた出前授業へのニーズがあると思われた。そこで、高校側が望む内容をつかみ、それに対応したメニューを用意する。設問 12 は、そうした高校へ出前授業の道を開く糸口を探る目的をもった設問であった。

しかし、「出前授業に望む具体的テーマ」の記述例をみると、「興味をひくものであれば何でも」という声に代表されるように、漠然としたものが多い。これまでの経験が無いため、具体的にイメージすることができなかつたとみられる。表 1 からは出前授業に望む時代で「近世」が多いことがわかるが、これも単にこのアンケートの調査期間が近世の授業が行われている時期であり、回答し

【設問 12 「出前授業に望む具体的テーマ」記述例】
 縄文時代の経済／縄文・弥生文化と秋田県の遺跡／
 稲作の伝播と社会の変化について／擦文文化と貝塚
 文化／秋田城・弘田柵と古代政治／秋田城・貨幣・
 戦争…実物資料も合わせて／十和田火山噴火時の社
 会／檜山安東氏について／菅江真澄と秋田について
 ／米と幕藩体制について／近世の秋田(藩政・産業・
 文化)／県北と県南の違いについて／古代～近世の
 秋田の社会・経済／秋田の民俗、生活史など／秋田
 に関するもの／日本人の誇りを高めるもの／興味を
 ひくものであれば何でも 等

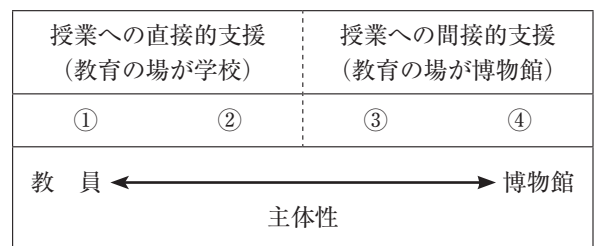
ている時点での切迫性があった、という以上の意味は無さそうである。要望を待つよりは、博物館側から魅力あると思われるプログラムを提案していくといった形をとったほうがよいだろう。「望む具体的テーマ」として記述された「秋田城」や「十和田火山噴火」、「菅江真澄」などについては、高校の授業と考古学とを結びつけての内容構想が可能だと思われる。秋田県の県北と県南の違いについても、時代をまたいだテーマ史として構想できるだろう。

設問 13 からは、高校日本史教員が博物館をどのように利用したいと考えているのか、その傾向を捉えることができた。回答された要望は、タイプとして 4 つに分類されると思われた。すなわち、①教材の提供について、②教員への情報提供について、③博物館教室について、④博物館展示について、である。図 2 で示すように、このうち①②は学校で行われる授業への支援に関わる要望、③④が博物館で行われる事業に関わる要望である。また、①へ向かうほど学校教員の主体性が強く、④に向かうほど博物館の主体性に任されている。具体的な提案数としては①②が多く、③にも「授業に無理なく組み込める」ようなものへの要望が

表 1 出前授業で望む分野

	政治	経済	社会	文化	民俗	計
原始		3	11	3	2	19
古代	8	1	10	3	2	24
中世	2	3	7	0	2	14
近世	5	6	10	6	6	33
近現代	5	5	5	2	1	18
計	20	18	43	14	13	108

図 2 日本史教員の博物館への要望

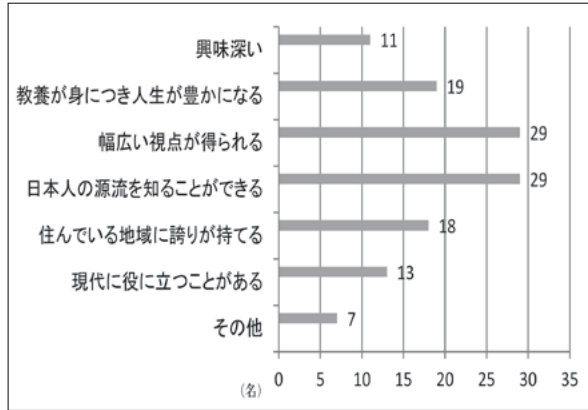


記されている。日常的な授業の場、ペースや教員の主体性を保持したい姿勢がみえる。この点は、おそらく小・中学校との違いであり、しかし、博物館はこれまでこの違いをそれほど意識せずに高校に接してきた。

本館では①に関しては博物館資料の貸出、②に関しては「教員のための博物館の日」、③に関してはセカンドスクール事業を実施している。そして、④に関してはもちろん積極的に企画を行って今年度は企画展「石斧のある世界」が好評だった。だとすれば、挙げられた要望からは、従来の取組における対応や内容などを見直すことが求められているのだと思われる。特に、②③については、これまで展示室の解説が主になり、どのように授業に活用できるかという面でのサポートが不足していた点、本館でも自覚してきたところである。出前授業の企画化とともに、この点も再検討したい。

最後の設問 14 では、「現代に生きる私たちが原始時代を学ぶ意味」について選択式（複数回答可）で質問した。「私たち」には回答者（教員）自身を含む。教員が原始時代にどのように向き合っているのかを問うたものである。回答者全員の結果は、図3に示したとおりである。原始時代を学ぶ意味として、「ウ. 広い視野が得られる」、「エ. 日本人の源流を知ることができる」と回答したのがそれぞれ 29 名（58.0%）ずつだった。この二つの選択肢のうちいずれか、または、この二つとも回答した教員を数えるとその計は 42（84.0%）で、ほとんどの教員がこの2点を中心に考えていることがわかった。

図3 現代人が原始時代を学ぶ意味



高校生は、学習内容に対して「学ぶこと自体の楽しさ」に加えて、それが「役立つか」を重要視する発達段階にあるという（市川 2001）。「どうしてそれ（原始時代）を学ぶのか」と問う高校生に、教員や博物館学芸員はそれぞれ答えることのできる意味を持っていることが必需だといえる。博物館としても、ただ興味・関心を高めるというのではなく、特に教育的プログラムを企画する背景において活動内容の意義・意味を意識することが大切であろう。

「原始時代を学ぶ意味（その他）」の具体的な記述例には、「生きるための知恵」や「持続可能な社会」、「原始とつながっている」、「ルーツ」といった表現や語がみえる。この背景には、「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群の世界遺産登録をめざして」いる地域に居住していることがあるのかもしれない。つまり、近年、現代日本と縄文時代の連続性や現代社会が縄文時代に学ぶべきことを述べた言説を見聞きする（御所野縄文博物館 2011, 岡村 2014 など）。縄文人の「豊かな精神世界」

【設問 13 「出前授業の他に日本史教員として博物館に望むこと」記述例】

- ①市町村教育委員会の文化課のように気軽に遺物を借りたい／石器や土器片などの資料の貸し出し／資料や史料で、実際に生徒が触れることができる（使用することができる）ものが増えれば良いと思う／資料（史料）複製の各校への配付（定期的年1～2回）／漆紙文書や絵巻物のレプリカを貸し出してほしい／提示資料・教材のレンタル3／授業で利用できるリーフレット（地域の歴史的な題材を取り上げたコラム記事を掲載したようなもの）
- ②日本史教員対象の講習会／教員のための学習講座の開催／例えば仙台市博物館のような教員向けプログラムがあればと思います。専門の学芸員の方から高いレベルの情報を得る機会がほしいところです／秋田の遺跡や史料等に関する情報提供、研修
- ③高校の授業の中に無理なく組み込める博物館利用のプログラムを開発してほしい／博物館での座学授業
- ④今年度は特におもしろいテーマで企画展を行っていたので、来年度もどんどん企画してほしい

【設問 14「原始時代を学ぶ意味（その他）」記述例】
 「政治史」主体の教科書の中で、数少ない「生活史を中心とする分野であり、また、生徒の思考力を高める上で有意義な学習が展開できる／歴史を学んでいく上での基本的な姿勢やものの見方を養っていくために、原始・古代には比較的時間をあてています／生きるための思考や知恵を身に付けるヒントとなる2／持続可能な社会、自然との共生を学ぶことでこれからの地球社会の在り方の参考になる／私たち人類の歩みが今日まで続いていると実感できる。そのため、生徒にも身近な歴史資料を使って、原始と生徒たちがつながっていることを理解させたい／日本民族のルーツを考えること。私たちは何者で、どのようにがんばってきたのか。日本のすばらしさを知るため／大学進学で、文学部史学科など歴史・考古専攻を希望する生徒の基礎学力となる

をテーマにした催しも県内外で盛んに行われている。こうしたことが教員の授業を支える意識にも反映されているとみえるのである。なお、ここで付け加えれば、このような動きを察知して授業に取り上げること自体は意義深いと考えるが、同時に、「望まれる縄文時代像」を客観視する視点も持ち合わせたいところである。考古学と現代社会がどのような関係を持っていたのかなどを考察する「メタ考古学」によれば、縄文時代という時代区分の概念が成立したのは第二次大戦後であり、しかも社会状況に対応して縄文時代像が変化しているという（山田 2015）。むしろ、こうした点に注目して、今現在「望まれている縄文時代像」を生徒に読み取らせることで、縄文時代の学習を現代理解につなげる、といった授業展開をするのが望ましいと思われる。縄文時代観の変遷を通しては戦後社会の様相の変化についての考察もでき、これは現代史の授業として、「日本史A」や「現代社会」の授業としても行うことができる。

この他、原始期の学習を通じて「生活史を中心に思考力を高める学習ができる」、「歴史を学ぶ上での基本的な姿勢やものの考え方を養うことができる」との指摘に共感を覚えた。原始時代を学ぶ意味や、その特性に注目した工夫を考えるためのヒントとなる指摘と言えよう。

（4）アンケート調査報告のおわりに

以上、高校における旧石器・縄文時代教育の現況について、日本史担当教員を対象にしたアンケート調査結果を報告するとともに、その分析を3つの視点から行ってきた。取組の状況や課題、「博学連携」の可能性をいくらかでも浮き彫りにすることができたと考える。「博学連携」を図るとき、教員の博物館への関心を高めること、教員と博物館との信頼関係を築くことが何よりも欠かせない（浅野 2015）。全ての校種の中で高校及び高校生が博物館と最も遠い距離にあるとみられる現在、このアンケート調査を実施し、高校日本史教員から回答が寄せられ、博物館が結果をまとめて高校へ向けて報告する、このことこそ、共に理解を深めながら「連携」へ向かうステップそのものであったとも言える。

3 高校らしい旧石器・縄文時代の学習内容とは 一中・高の教科書比較から一

（1）調査の方法と中高教科書内容重複度

かつて、小学校・中学校・高校にわたって一貫して日本通史を教える仕組みが提案されたこともあった（中村哲 1995）。しかし現在、基本的には小中高それぞれで原始から現代に至るまでの日本史を学ばせる形が保持されている。それぞれの段階での目標や内容、学習量は違って、単なる繰り返しが行われているわけではない。先述のアンケート結果にも、高校教員に単純な繰り返しを避けようとする意識があることが示されていた。だが、特に中学校社会（歴史）と高校日本史Bはいずれも通史で、内容が重複していることが指摘されている。中学校社会（歴史）教科書には世界史的内容を含むがその比率は約20%で、大部分が日本史の内容だという（中村薫 2014, 茨木 2011）。

繰り返しも意味はあろう。更に詳しく学習するときに既習事項の確認は不可欠である。しかし、近現代史重視で前近代史にかけられる時間が制約されている上に、次期学習指導要領のキーワードはアクティブ・ラーニング（AL）である。思考力重視で調べ、考え、発表する等に時間が割くべき中、高校の前段階で済ませておくべき内容は精選し、高校段階にふさわしい内容を重点化することがこ

れまで以上に強く求められてくる。そこで、ここでは中学校社会（歴史）教科書と高校日本史B教科書の記述の重複や違いを明らかにすることで、高校段階において何を重点とすべきなのかを考える。中・高間の学習目標や内容の重複や違いについては、学習指導要領の文言を比較することでも読み取れようが、教科書の記述を比べたほうがより具体的に、教員や生徒の立場でつかむことができると判断した。

表2は、高校日本史B教科書の旧石器時代・縄文時代に関わる部分の全文字数のうち、中学校社会科（歴史）教科書と内容が重複する部分の文字数とその比率をまとめたものである。高校教科書は、占有率60%超である⁽⁶⁾『詳説日本史』（山川出版社2014）を用いた。中学校社会科（歴史）教科書は、秋田県で採択率が高い『新しい社会 歴史』（東京書籍2012）を中心に、『中学社会 歴史 未来をひらく』（教育出版2012）や『中学社会 新しい日本の歴史』（育鵬社2012）などを参照した。計数の際、中学校教科書では、図や写真等に付された文や挿画に描かれているものも説明文があるものと見なした（例えば、挿絵に丸木舟が描かれている場合、高校教科書の「丸木舟が各地で発見されており」という文と内容が重複していると判断した）。中学校・高校いずれの教科書でも、本文の流れとは別枠（別頁）仕立てのコラム類は省いた。他、便宜上、句読点は数え、年号の半角数字は2文字で1字として計算した。

元々中学校の教科書がそれなりに詳しいためか、高校でも基本を押さえる必要があるためか、教科書本文だけで比較すると旧石器時代、縄文時代共に半分以上の内容が重複していることが判明

表2 中学校・高校教科書の内容重複度

		本文	脚注	全体
A. 高校日本史B教科書記述文字数 (字)	旧石器	1,291	704	1,995
	縄文	1,842	499	2,341
	全体	3,133	1,203	4,336
B. Aのうち中学校社会科教科書と内容が重複する部分の字数 (字)	旧石器	677	199	876
	縄文	954	42	996
	全体	1,631	241	1,872
C. 高校-中学校間教科書内容重複率 (%)	旧石器	52.4	28.3	43.9
	縄文	51.8	8.4	42.5
	全体	52.1	20.0	43.2

した。高校教科書の脚注となると詳細な内容となり、中学校教科書に記載されていない事項がほとんどであるために重複率は低く約20%であるが、それでも教科書記述全体の比較で重複の部分が約40%強であることがわかる。

(2) 世界史的な視点-高校教科書の特徴①

表3は、中高で重複していない、言い換えれば高校教科書に特徴的な内容の主な内訳をまとめたものである。これによると、高校教科書に特徴的な内容は、一つは世界史的な視点のものである。例えば、旧石器時代の記述では、「このうち港川人は、小柄で顔が四角く立体的であるなど、縄文人と似ているところもあるが、オーストラリア先住民と似ているところもあることから、南方からの渡来が考えられる。」(本文)や「日本語も、語法は朝鮮語やモンゴル語などと同じアジア大陸北方のアルタイ語系に属する。」(脚注)などと、他地域と比較することで世界の中の日本という意識を明確にしている。また、「旧石器時代の終わり頃には、細石器と呼ばれる小型の石器も出現している。この細石器文化は、中国東北部からシベリアにかけて著しく発達したもので、北方から日本列島におよんだものである。」(本文)といったように、日本列島における現象を世界的視野から俯瞰した記述もある。この種の記述は、旧石器時代の項において本文・脚注計で395字あり、旧石器時代の項における高校教科書に特徴的な内容のうちの3分の1強の割合を占める。

縄文時代の記述にも、「磨製石器が広く存在す

表3 高校歴史教科書に特徴的な内容

		本文	脚注	全体
a. 高校日本史B教科書だけにみえる記述の文字数 (字)	旧石器	614	505	1,119
	縄文	888	457	1,345
	全体	1,502	962	2,464
b. aのうち世界史的視点での記述の文字数 (字)	旧石器	211	184	395
	縄文	94	121	215
	全体	305	305	610
c. aのうち考古学等の学問に関わる記述の文字数 (字)	旧石器	209	230	439
	縄文	202	152	354
	全体	411	382	793
d. b・c記述文字数合計のa全体に占める割合 (%)	旧石器	68.4	82.0	74.5
	縄文	33.3	59.7	42.3
	全体	47.7	71.4	56.9

ることから、縄文時代がユーラシア大陸各地の新石器時代に対応することは明らかであるが、西アジアや中国などでは新石器時代になると農耕や牧畜など食料生産の段階に入るのに対し、日本の縄文文化は基本的には食料採取段階の文化である。」(脚注)といった、世界史的視点から日本列島における現象を相対化した記述などがみられる。縄文時代の項では、本文・脚注計で215字。これは縄文時代の項における高校に特徴的な部分の16.0%である。旧石器時代に比べると世界史的視点が弱い印象であるが、「日本列島における黒曜石の分布」図(高校教科書中の図は今回の比較対象としては除外している)には、九州腰岳産の黒曜石が朝鮮半島へ、北海道白滝産の黒曜石がサハリン・沿海州へ分布している様子が示されていて、閉じた列島史にならないような配慮が窺える。

旧石器時代では動物と人の移動の記述が、そして弥生時代以降については大陸との活発な交流の記述がある中で、先述のアンケート調査設問10の結果にみるように、縄文時代における大陸との交流については見過ごされがちである。これは、教員自身が高校生の頃に日本史を習った際に獲得した「孤立していた縄文時代」像を継承していることが一因であると思われる。縄文時代の地域間交流の正しい理解のために、または、「日本文化の特質把握のために「原型」を措定し、これを原始(縄文)時代に求める「日本文化論」(島貫, 石川1995)は、先に紹介したメタ考古学の考え方からみると危ういものである。グローバルな視点で日本を捉える観点がなお求められている中、教科書の字数以上に世界史的な視点を授業に取り込むことに注意を払うべきと考える。

(3) 根拠の明示－高校教科書の特徴②

次に、高校教科書に特徴的な内容のまた一つは、

教科書の記述の背景にある考古学を主とする学問に関わるものや学問の存在を窺わせるものである。例えば、旧石器時代の項には、「遺跡や遺物から人間の歴史を研究する考古学では、使用された道具(利器)の材質により人類の文化を石器時代・青銅器時代・鉄器時代に区分している。」(脚注)や「日本列島で発見されている旧石器時代の遺跡の多くは約3万6000年以降の後期旧石器時代のものであるが、各地で中期(約3万6000年～約13万年前)や前期(約13万年以前)旧石器時代にさかのぼる遺跡の探究が進められている。」(脚注)など、考古学の定義や時代区分、研究状況等に関する記述が盛り込まれている。地質学や人類学に関する、あるいは依拠した記述も含めると、本文・脚注計で439字。旧石器時代の項における高校教科書に特徴的な内容のうちの39.2%である。

縄文時代の項にも、例えば「この縄文土器の変化から、縄文時代は草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の6期に区分される。」(本文)や「土器・石器・骨角器などの人工遺物のほか、貝殻に含まれるカルシウム分によって保護された人骨や獣・魚などの骨が出土し、その時代の人びとの生活や自然環境を知るうえで重要な資料となっている。」(脚注)などといった考古学の資料論に類した記述がみられる。本文・脚注計で354字。縄文時代の項における高校教科書に特徴的な部分の26.3%、4分の1強の割合である。

実は、中・高教科書の内容が重複している部分でも、こうした記述の背景にあるものを示すという高校教科書の特徴が指摘できる。表4に見るように、総じて、中学校教科書が旧石器文化、縄文文化の内容を事実として説明するのに対し、高校教科書では「なぜそう言えるのか」を示す⁽⁷⁾。

表4 中・高教科書の記述比較

<p>【中学校】縄文時代は…(中略)…海面が上昇して入り江にめぐまれたために魚や貝類が豊富にとれ、くり、どんぐりなどの木の实や鳥、しか、いのししなどの動物が豊かだったので、農耕や牧畜はあまり発達しませんでした。海岸や水辺には、食べ物の残りがすなどを捨てた貝塚ができました。(東京書籍2012 p.29)</p>
<p>【高校】狩猟には弓矢が使用され、落とし穴などもさかんに利用され、狩猟のおもな対象はニホンシカとイノシシであった。また、海面が上昇する海進の結果、日本列島は入江の多い島国になり、漁労の発達をうながした。このことは、今も各地に残る縄文時代の貝塚からわかる。(山川出版社2014 p.13) ※傍点筆者。</p>

内容というより、むしろこれは記述姿勢の違いであるようだ。

(4) 中・高の教科書比較からみえるもの

比較を通して改めて実感したのが、原始時代の項において中学校と高校の教科書で記述内容がかなり重複することである。自然環境から始めて当時の生活の様子を描写する記述の骨格が同じであり、特に縄文時代については文字数の比較でみるよりも、重複率が高い印象を受けた。先述のアンケート調査結果では、「原始期の授業を繰り返す意味」として「通史としての系統性保持に必要」と回答した教員が45名中16名であったが、確かに必要であるにせよ、重なるの幅が広いがゆえに、中学校と同じようなアプローチで授業をすると、結局、単なる繰り返しになってしまうと思われた。例えば、導入に中・高の教科書比較を生徒にやらせてみるというのはどうであろうか。そこで中・高間の違いを列挙させた後に、違いについて考察させるという展開である。また、高校教科書の特徴と関係するが、「なぜそう言えるのか」を考察させながら展開していく授業も構想できるかと思う。この場合は、博物館が資料や情報を提供したり、出前授業をしたりと協力することができよう。縄文時代の生活と信仰についての理解を深めつつ、「様々なものが歴史を考察する上での資料となり得ることに気付かせる」(文部科学省2009)ことは、博物館等の常設展示室では現在でも可能であるが、これを高校の教室でも再現するための方策や内容について検討してみたい。

比較後の分析を通しては、高校教科書の特徴である世界史的視点で日本史をとらえるという立場が、日本列島外との交渉が社会の動きや文化の変容などの点において大きな意味を持たなかったとされる縄文時代(加藤2013など)の記述においても貫かれていることがわかった。新「日本史」に向けての方向性が既に示されているのである。先述のアンケート調査結果では、高校日本史教員の何人かが日本人のルーツについて授業で取り上げていると回答していた。確かに、例えば最近の富山県小竹貝塚出土人骨の研究による成果を俎上にあげるのは、高校の授業ならではと考える。世界史的視野を感じさせるテーマであるし、新しい

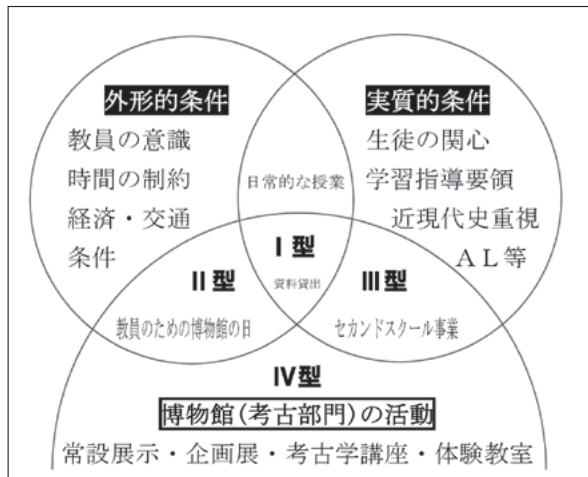
事実の解明で歴史が見直される過程の紹介は、資料や学問研究の裏付けがあって歴史の叙述が成り立っていることを具体的に示すからである。一方で、原始時代の授業では「文化財保護への関心を高め、地域の文化遺産を尊重する態度を養うことも重要である」とされる(文部科学省2009)。県立博物館には、地域資料から他地域や東アジア世界との交流が見通すことができる資料や情報を示し、活用をすすめることが求められるだろう。

4 「博学連携」を高校で実現する方法とは

博物館考古部門ではこれまでもさまざまな「博学連携」の取組をおこなってきた。しかし、高校へはほとんど浸透してこなかった。ここでは、この課題を打開するための方法について考えたい(図4参照)。

高校との「博学連携」を考えると、「外形的条件」と「実質的条件」という2つの条件について考慮することが必須であると考えられる。「外形的条件」とは、教員の人数や意識等や教育課程などによる時間の制約、博物館に来館するための経済・交通事情など、授業を支える人・モノ・金・仕組みに関することである。「実質的条件」とは、生徒の関心や学習指導要領、アクティブラーニング(AL)等、授業の内容や方法に関することである。そして、この2つの条件を達成しているかどうかを基準に、「博学連携」は次の4類型に分類できるとみる。それぞれの類型には、これまでの本館の「博学連携」事業も位置づけた。

図4 博学連携の4類型



I型 外形的条件、実質的条件ともに達成している。日常的な授業はこの型である。この型の「博学連携」には、博物館による資料貸出がある。

II型 外形的条件を達成している。この型の「博学連携」には、「教員のための博物館の日」がある。教員が出張しやすい期日に博物館内で実施している。

III型 実質的条件を達成している。この型の「博学連携」には、セカンドスクール事業がある。ただし、ほとんどが小学校・中学校を対象としている。博物館内で実施している。

IV型 どちらの条件も直接的には達成していない。考古学講座は生涯学習の観点から実施している。土器・石器づくりなどの体験教室は、小学校向けの出前授業と内容が類似するので、小学校としてはIII型といえる。博物館内で実施。

もちろんI型が高校にとって最も利便性が高い。他の型の事業は、基本的に次のようにI型に近づけるといって方向性で改善策を考えることが有効であると考えられる。

I型 博物館による資料貸出をここに位置づけたが、高校教員アンケートで「貸出を行ってほしい」との要望を受けたように、これまでの貸出資料は高校の授業の目標や内容に合うものとはいえなかった。実質的条件を意識し、ラインナップの見直しを検討したい。

II型 「教員のための博物館の日」については、その内容が教員対象の展示室、企画展の案内や説明にとどまっていた。これも実質的条件を考慮して内容を見直し、教員が授業のための即戦力とできるような事業にしたい。

III型 高校教員アンケートでは、博物館での座学授業や授業内容と直結したプログラムの開発を求める声があった。体験学習が主の、校外学習となるセカンドスクール事業は望まれていない。そこで、これを

外形的条件を考慮して見直すと、出前授業ということになるだろう。本稿の2(3)で述べたように、授業案を示して活用を促したい。

IV型 何もかも高校側の条件に合わせていくことは、利便性は高めてもかえって高校生の可能性を狭めてしまう恐れがある。また、博物館の魅力も削いでしまいかねない。IV型は基本的に従来通りとし、I～III型の活動を通して、IV型の博物館事業への高校生の関心を高めるといって方向で考えたい。授業の枠外に広がる学問の世界などに触れさせ、参加させたいと思う。

利用者側が利用しやすい形を整備する。特に、これまで連携が弱かった高校との関係を構築して恒常化するとき、このことは意識されなければならない。しかし、考察の結果、何も新しい事業を立ち上げる必要がないことが窺えた。学校の授業では体験できない、また、学校の授業とは違う視点での知見に出会うことができる、そういう博物館の魅力はそのままいい。学校や教員が求めるものに依じて、博物館が行ってきたこれまでの事業をアレンジすることが、「博学連携」を着実に進める一つの道だと考える。

5 むすびにかえて

考古資料を主な対象としたフィールド・ワーク(校外学習)には、伝統的に二つの型があるという。「一つは小学校に多く、戦前の郷土教育を批判的に継承したもので、社会科歴史という教科指導の中に位置づけられるもの」、「もう一つは中学・高校に多いもので、課外活動としてクラブ活動の中で行われる」(西川1986)。なるほど、セカンドスクールや体験活動プログラムがほとんど小学生向けに作られ、利用・参加するのも多くは小学生であるのは宜なるかなである。教科指導の中に位置づけられる校外学習の慣習は高校全般には存在しなかったのである。だから、高校における考古の「復活」を画するとき、考古クラブの振興やかつての考古クラブの遺産である学校所蔵資料の活用促進という発想となる(池内2014, 村野2015)。あるいは、考古学と個人的に深く関わった教員が

考古学的立場から行う実践が、断片的に積み重ねられてきた(長島 1995 など)。確かに、これらは熱意あふれる大変魅力的で、特に考古クラブ活動の振興は高校生のポテンシャルを伸ばす成果をあげつつあり、ますます盛り上がって欲しい取組である。しかし、一般化するには限界がある。

ここで、高校日本史における「博学連携」の促進、一般化を考えると、二つの方向性が見込まれる。一つは、これまで無かった校外学習の慣習を高校に普及させようというものである。同じく伝統的に校外学習が教科指導の中に組み込まれて無かったとされる中学校は、今や盛んに博物館のセカンドスクール事業を利用するようになっている。高校でも実現できるのでは、という期待である。そしてもう一つは、博物館が校内学習の場に入り込んでいくというものである。高校は新たな学校行事を入れる隙間が無い、教員は多忙化で、高校生も課題や部活動等だとなれば、日常の授業に博物館がコミットしていくとよいのでは、という着想である。これならどの高校にも対応し得る。

どちらの方向性も有効だろうが、本稿は、このうち後者の考えに立って論述してきたものである。高校とコミットしていく上では、博物館が高校教員の考えや日常の授業内容などの理解が欠かせない。そのため、アンケート調査や教科書分析を行い、これらに基づいていくつかの案を示した。高校側も博物館側もそれぞれ一歩踏み出すことで実現できるような案であると思う。小・中学校には博物館の教育活動の利用がある程度普及している⁽⁸⁾。多くの生徒は高校入学前に、学校や学年等の単位で博物館を訪れている。そうした高校生に単純な繰り返しではない、発展的な学びを提供するという視点も意識したい。

今後も、情報発信やプログラムの提示を博物館側が一方的に行うのではなく、教員や生徒の声を聞き、企画に反映させていくことが大切だと考えている。「思考力重視型」、「グローバルな視点で日本を捉える視点」など、高校日本史も変革期を迎えて、広い視野での取組が望まれている。本稿で述べてきたような原始時代学習における「博学連携」が突破口となり、変革期を迎えつつある高校日本史学習が課題を乗り越えて充実し、博物館

の教育普及活動が洗練、活発化し、なおかつ、考古学を支える社会の裾野が広がることを期したい。

本稿の作成にあたっては本館主査(兼)学芸主事吉川耕太郎氏より多大なる御教示を賜った。ここに記して深く感謝を表する次第である。

註

- 〈1〉2014(平成26)年5月、日本考古学協会は「小学校学習指導要領の改訂に対する声明」を発表し、今度は旧石器時代を小学校の歴史学習で取り扱うよう求めている。
- 〈2〉この数年来、高校での日本史必修化を求める意見の多くは地方自治体や地方議会が表明している。
- 〈3〉近年、考古学系クラブ活動や学校所蔵考古資料の活用の支援といった意欲的な取組が高校生・高校に向けて行われている(池内2014, 村野2015)。大変魅力的な活動であるが、授業と直接にリンクするものではなく、また、対象となる生徒や学校は限定的である。京都大学総合博物館が進める高校生の「探究活動」を支援する取組は、日常的な授業と結び得る点で興味深い。理科教育においては、博物館と高校の授業とをつなぐ研究がみられる(寺田安孝他2010「高校生のための博物館学習プログラムの実践」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』13号 pp.51-57など)。
- 〈4〉この時点での「歴史総合」の呼称。
- 〈5〉本稿では一般的な高校生の日常的な学習を支援して深化させることをテーマにしているため、博物館と「総合的な学習の時間」や課外活動との関連づけについてはここでは言及しない。
- 〈6〉『教科書レポート』(2014)より。60%超とは、より正確に述べると60.6%。ちなみに第2位は『新選日本史B』(東京書籍)で10.6%。
- 〈7〉いくつかの中学校教科書では、本文とは別頁の発展学習の形-例えば、「深めよう考古学のとびら」(東京書籍2012)、「深める歴史 原始の時代を知る方法」(清水書院2012)-で、教科書の記述を成り立たせている考古学の紹介をしている。
- 〈8〉本館のセカンドスクール事業は、今年度、小学校74校(全県の小学校213校の34.7%)、中学校28校(同119校の23.5%)が利用している。

(2016年1月13日現在)

参考文献

- 浅野晋司 2015 「『もう一つの特別教室』であることを目指して～“博学連携”で学習支援課が大切にしていること」『兵庫県立考古博物館研究紀要』第8号 pp.75-98
- 池内一誠 2014 「高等学校と考古学の新時代に向けて」『全国高等学校 考古名品展』九州国立博物館 pp.98-104
- 泉田健・石澤宏基・吉川孝 2000 「考古資料を用いた授業 (1)」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第15号 pp.36-63
- 市川伸一 2001 『学ぶ意欲の心理学』PHP 新書
- 茨木智志 2011 「成立期の世界史教育に関する総合的研究」『科学研究費補助金研究成果報告書』 pp.81-82
- 岡村道雄 2014 『縄文人からの伝言』集英社新書
- 加藤謙吉他 2013 『NHK さかのぼり日本史外交篇 10 飛鳥～縄文こうして“クニ”が生まれた』 p.182
- 剣持輝久 2011 「考古学と歴史教育」『考古学ジャーナル』621号 pp.30-31
- 御所野縄文博物館 2011 『ゴミに感謝した縄文人』企画展図録
- 島貫学・石川俊一 1995 「日本史と世界史」『歴史はどう教えられているか 教科書の国際比較から』日本放送出版協会 pp.150-172
- 社会科・歴史教科書等検討委員会 2008 「社会科・歴史教科書を考える－小学校の教科書から消えた旧石器・縄文時代の記述－」『日本考古学』第26号 pp.181-202
- 勅使河原彰 1995 『日本考古学の歩み』名著出版 pp.262-265
- 長島雄一 1995 「高等学校の現場から－「日本史A」の近現代史重視の中で－」『考古学研究』第42巻第

2号 pp.33-37

- 西川宏 1986 「学校教育と考古学」『岩波講座日本考古学7 現代と考古学』岩波書店 pp.169-208
- 古市秀治 2003 「『現代社会』の授業と考古学」『考古学研究』第50巻第3号 pp.37-41
- 古市秀治 2004 「歴史教育と考古学－学習指導要領からみた考古学」『考古学研究会50周年記念論文集文化の多様性と比較考古学』 pp.463-471
- 中村薫 2014 「日本学術会議の高校地理歴史科改革案について (2)－時系列型を意識した「歴史基礎」－」『同志社大学教職課程年報』3号 pp.3-14
- 中村哲 1995 「歴史教科書の国際比較」『歴史はどう教えられているか 教科書の国際比較から』日本放送出版協会 pp.13-28
- 日本学術会議史学委員会高校歴史教育に関する分科会 2014 『提言 再び高校歴史教育のあり方について』
- 村野正景 2015 「学校考古を支援する博物館のとりくみ－京都府内の学校所蔵考古資料に関する調査の概報－」『京都文化博物館研究紀要 朱雀』第27集 pp.17-37
- 文部科学省 2009 『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』 pp.9-10, pp.64-65
- 山田康弘 2015 『つくられた縄文時代－日本文化の原像を探る』新潮選書

参照教科書

- 山川出版社 2014 笹山晴生他 『詳説日本史』
- 東京書籍 2012 五味文彦他 『新しい社会歴史』
- 教育出版 2012 笹山晴生他 『中学社会 歴史 未来をひらく』
- 清水書院 2012 三谷博他 『新中学校 歴史 日本の歴史と世界』
- 育鵬社 2012 伊藤隆他 『中学社会 新しい日本の歴史』

秋田県立博物館考古部門アンケート
- 高等学校日本史における旧石器・縄文時代の取り扱いに関わるアンケート -

- 1 あなたの年齢についてお答えください（該当する記号を○で囲んでください）。
ア. 20歳代 イ. 30歳代 ウ. 40歳代 エ. 50歳代 オ. 60歳代

- 2 あなたのご専門（学生時代の専攻、得意分野など）は何ですか。（該当する記号を○で囲んでください。複数回答可。）
考古学 [ア. 旧石器時代 イ. 縄文時代 ウ. 弥生時代 エ. 古墳時代以降の古代
オ. 中世 カ. 近世 キ. 近現代 ク. その他 ()]
日本史 [サ. 古代 シ. 中世 ス. 近世 セ. 近現代 ソ. その他 ()]
教育学 [タ. 日本史教育 チ. その他 ()]

- 3 あなたが現在担当している日本史科目をお答えください。（該当する科目名を○で囲み、単位数を記入してください。）※日本史を担当していない方は設問6へお進みください。
1年 日本史A (単位) 日本史B (単位)
2年 日本史A (単位) 日本史B (単位)
3年 日本史A (単位) 日本史B (単位)

- 4 （日本史Bを担当している方へ）縄文時代までに何時間かけていますか。（括弧内に数字を記入してください。小数は、例えば授業時間の半分程度であれば「0.5」と記してください。）
※日本史Bを担当していない方は設問6へお進みください。
旧石器時代 (分) 授業を (コマ)
縄文時代 (分) 授業を (コマ)

- 5 設問4でお答えになった時間について、
(1) 5年前と比較して変化しましたか。
(2) また、どうお考えですか。（該当する記号を○で囲んでください。）
(1) ア. 増えている イ. 変化していない ウ. 減っている エ. わからない
(2) カ. 時間が多い キ. 適切である ク. 時間は不十分である
ケ. その他 ()

- 6 近現代史重視傾向が高まる中での旧石器・縄文時代史（原始）の学習について、どのように考えますか。（該当する記号を○で囲んでください。）
ア. 近現代を学んだほうが良いので原始の学習は縮減したほうが良い
イ. 原始もこれまでと同じくらい学んだほうが良い
ウ. 原始の学習をもっと増やすほうが良い
エ. その他 ()

- 7 小学校・中学校そして高校と、原始時代の授業が繰り返されることについて、どのように考えますか。
(該当する記号を○で囲んでください。複数回答可。)
- ア. 繰り返しが無駄なので高校では原始の学習は削除あるいは大幅に減らしてもいい
 イ. それぞれの段階で観点が違うので高校での原始の学習は必要である
 ウ. それぞれの段階で内容が深まっていくので高校での原始の学習は必要である
 エ. 通史としての系統性を保つために高校でも原始の学習は必要である
 オ. その他 ()
- 8 旧石器・縄文時代史の授業で、原始と現代とをつなぐ内容を含めた実践(現代の生活や社会と照らし合わせ課題提起をする等)をしたことがありますか。(該当する記号を○で囲んでください。「ア」の方は実践内容の概略を簡単にご紹介ください。)
- ア. ある イ. ない (内容概略:)
- 9 旧石器・縄文時代史の授業で、言語活動の充実や思考力を重視を図る内容を含めた実践をしたことがありますか。(設問8と同様にお答えください。)
- ア. ある イ. ない (内容概略:)
- 10 旧石器・縄文時代史の授業で、東アジアとの関係からとらえる内容を含めた実践をしたことがありますか。(設問8と同様にお答えください。)
- ア. ある イ. ない (内容概略:)
- 11 旧石器・縄文時代史の授業で、地域(秋田県および周辺)の遺跡・遺物などを取り上げた実践をしたことがありますか。(設問8と同様にお答えください。)
- ア. ある イ. ない (内容概略:)
- 12 博物館の出前授業を利用するならば、何時代のどの分野のものを望みますか。(記号を組み合わせでお答えください。複数回答可。) 例: 古代、政治史なら「b, ア」
 また、出前授業に望む具体的なテーマがあれば記してください。
 a. 原始 b. 古代 c. 中世 d. 近世 e. 近現代
 ア. 政治 イ. 経済 ウ. 社会 エ. 文化 オ. 民俗 カ. その他 ()
 (,) (,) (,) (テーマ:)
- 13 出前授業の他に日本史教員として博物館に望むことがあれば、自由に記してください。
- 14 現代に生きる私たちが原始時代を学ぶ意味は何だと考えますか。(該当する記号を○で囲んでください。複数回答可。)
- ア. 興味深い イ. 教養が身につく人生が豊かになる ウ. 幅広い視点が得られる
 エ. 日本人の源流を知ることができる オ. 住んでいる地域に誇りを持つことができる
 カ. 縄文時代を知ることによって現代に役に立つことがある
 キ. その他 () 御協力ありがとうございました。